

南極から附中へ

南極観測隊員のつぶやき

令和2年度 愛知教育大学附属岡崎中学校
校長通信 第23号 令和2年5月20日



○南極に挑戦した犬たち

・今回は、南極観測で働いた樺太犬について、お話します。初めて南極へ挑んだ日本人は、白瀬矗でした。アイヌの方2名と南極点を目指すために29頭の樺太犬を開南丸に乗せて連れていきます。赤道付近の暑さや病気で南極大陸上陸前に多くの樺太犬を失います。一旦、オーストラリアまで戻り、次の夏を待つ間にまた29頭の樺太犬を日本から送ってもらいます。その樺太犬たちを引き連れて、犬ぞりで南緯80度付近に達しました。しかし帰りにまた多くの犬を失ってしまいました。アイヌの方と北海道に帰ったのは1頭だけだったそうです「やまとゆきはら、関屋敏隆（校長文庫にあります）」。

・次に樺太犬が南極へ挑むのは第1次南極地域観測になります。22頭の樺太犬を連れて行きました。途中、赤道を越えなければならないため船内はととても暑くなりますが、開南丸の経験から観測隊員の部屋にはクーラーがなかったのですが、犬の飼育室にはクーラーがついていました。しかしやはり途中で病気になったりして、越冬した樺太犬は19頭になりました。第1次南極越冬が始まり、越冬中2頭が病死、1頭が逃げて帰ってきませんでした。越冬が終わり、1頭が子どもを産んだため、子どもと一緒に帰ることになりました。残る15頭は第2次越冬に向けて昭和基地に滞在



<かつて東京タワーの下にあった樺太犬の像>

けて昭和基地に滞在していましたが、天候不良により、第2次隊の隊員を昭和基地へ送り込むことができず、置いてけぼりになります。第3次観測隊が昭和基地へ行った時は、2頭の樺太犬が生き残っていました。それが「タロ・ジロ」です。15頭の樺太犬を置いてけぼりにしたことを多くの日本人が非難しました。その後、15頭の樺太犬を顕彰するために東京タワーの下に像が作られます。現在、この像は東京タワーが役目を終えたため、東京立川にある国立極地研究所に移設されています。南極で生き抜いた「タロ・ジロ」は、その後、ジロは昭和基地で亡くなります。亡骸は剥製にされ、東京上野にある国立科学博物館に展示されています。タロは日本に帰ってきて、北海道大学植物園で最期を迎えます。タロも剥製になって北大植物園の展示室にいます。2頭で南極の冬を生き延びた「タロ・ジロ」ですが、いまは離れ離れになっています。一緒にいさせてあげたいという運動もあります。でも名古屋港ガーデンふ頭には、「タロ・ジロ」の像が2頭仲良く並んでいます。



<ガーデンふ頭で並んでいる「タロ・ジロ」>